**「諸行無常・栄枯盛衰を詠う」　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

「の鐘の声、の響きあり。の花の色、のをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」

平家物語の冒頭部分を紹介いたしました。「諸行無常」「栄枯盛衰」とも、その本質は、「どのような栄華を誇ろうとも、それは長くは続かず、最後には跡形も無くなる。」という、人間の営みの宿命、儚さを言う物であると思われます。

　このたびは、「諸行無常・栄枯盛衰を詠う」と題しまして、人間の営みのさを詠った詩歌を紹介したいと思います。

　最初に、古代中国の戦国時代呉と越の国に焦点を当てます。これら二つの国は戦いにおいて「」「の恥をぐ」など成語を生み出しました。最初の戦いでは、越の王のが呉の王であったを破り、闔閭はこの時に受けた手傷のために死亡しました。

闔閭の子であるは、父の遺言に従って復讐を誓い、薪の上に寝て、その痛さに堪えることにより復讐心を忘れないようにしながら兵を鍛え、勾践と戦って勝ち、勾践を会稽山に包囲しました。勾践は自殺しようとしましたが軍師であるの勧めにより、自分は夫差の臣下となり、妻を夫差の妾にすることなどの条件を出して命乞いをし、夫差は忠臣であるの諫めも聞かず、勾践を許し、その後、周りの国を攻めてその盟主となるという栄華を誇りました。

勾践は、夫差に従うふりをしながら、「の恥をぐ」ことを決心し、肝を嘗めてその苦さに堪えることにより決心を忘れないようにして兵を鍛えました。又、という絶世の美女を差し出し、夫差を溺れさせました。そして、油断している夫差の隙を突いて戦を仕掛け、夫差を追い詰めました。夫差は命乞いをしましたが、范蠡が決して許さないように勾践に進言して、夫差は自殺し、呉は滅びました。

勾践の死後、越はにほろぼされ、呉と越の王宮はあとかたもなくなりました。

後にこの地を訪れた李白は、呉の都のあった地の様子を「」、その時の越の都のあった地の様子を「」と言う詩に詠いました。

始めに**「蘇台覧古」**を紹介いたします。かつての夫差が西施と享楽したとされるの宮殿は野原となり、曾て宮殿において西施を照らしていた月だけは、変わりなく、この地を照らしていると詠うことにより、呉の繁栄が無常のものであったことを表しています。「呉王宮裏の人」とは、傾国の美女とされる西施をさしています。

**舊苑荒臺楊柳新　　　 たなり**

**菱歌淸唱不勝春　　　 春にえず**

**只今惟有西江月　　　只今 惟だ　の月のみありて**

**曾照呉王宮裏人　　　曾て照らす の人**

　続きまして、**「越中懐古」**を紹介いたします。呉を破って返って来た越は繁栄を誇ったが、今では、その宮殿も跡形もなくなり、ただ、の飛ぶのが見えるだけだと詠うにより、同じく、越の繁栄も無常のものであったことを表しています。

**越王勾踐破呉歸　　　 呉を破って帰る**

**義士還家盡錦衣　　　義士 に還って 尽くす**

**宮女如花滿春殿　　　宮女 花の如く に満つ**

**只今惟有鷓鴣飛　　　只今 だの飛ぶ有るのみ**

　日本の僧であるは、明に留学中に、呉の宮殿のあったを訪れました。そのとき、山上から周りの風景を見ながら**「」**という詩を作りました。この詩の頸聯は、伍子胥がの名剣で自殺を命じられたこと、呉の都に越の旗であるの旗が立ち、占領されたことを示しています。

**姑蘇台上北風吹　　　 吹く**

**過客登臨日暮時　　　 す の時**

**糜鹿群遊華麗尽　　　はし華麗は尽き**

**江山千里版図移　　　千里 移る**

**忠臣甘受属鏤剣　　　忠臣甘んして受くの剣**

**諸将愁看姑蔑旗　　　諸将愁い看るの旗**

**回首長洲古苑外　　　をらせば の**

**断烟疎樹共凄其**　　 **共にたり**

呉の都のあった地を訪れたは、「」という詩を作り、李白と同じように、呉の都は荒れ果てており、西施が住んだと言われる「」には、西施を憐れむように真っ先に蘭の花が咲くようだと唱いました。**「呉城覧古」**を紹介いたします。

**吳王舊國水煙空　　　吳王の旧国 空し**

**香徑無人蘭葉紅　　　人無く なり**

**春色似憐歌舞地　　　の地を憐れむに似て**

**年年先發館娃宮**　　**年年先ず発す**

　又、は、呉王夫差のを訪れて「夫差の廟をる」という詩を作り、古木に夫差の名前が刻まれて神となっているが、あたりは寂寥としており、奏される音楽も誰を楽しませるものであろうかと唱っています。「呉王廟」を紹介いたします。

**姑蘇城畔千年木　　　 千年の木**

**刻作夫差廟裏神　　　してをの神とす**

**冠蓋寂寥塵満室　　　 塵 室に満つ**

**不知簫鼓樂何人**　**知らず 何人をか楽しましむ**

が勝利したあと、は、「勾踐とは、苦難を共にできても、歓楽はともにできない」として、勾踐のもとを去りました。「死して烹らる」は、の言葉として有名ですが、既にこのとき范蠡によって使われています。范蠡は、西施を伴って舟に乗って立ち去ったとされ、この様子が絵に描かれ、が詩に詠いました。この詩**「を載せるの図」**を紹介いたします。呉越の攻防を見るに付けても、人の世の興亡などは人の計り知れない物であると詠っています。

**安国忠臣傾国色　　　国を安んずるの 忠臣国を傾くるの色**

**片帆俱趁五湖風　　　にう 五湖の風**

**人間倚伏君知否　　　の 君知るや否や**

**呉越存亡一舸中**　　　**呉越の存亡 の**

傾国の美女西施は、色々な詩歌に取り入れられ、芭蕉の『奥の細道』「」にも、「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠まれていますが、中国浦陽江（・）の川岸に「西施石」という岩があり、西施がを洗ったところと伝えられております。この**「西施石」**を詠ったの詩を紹介いたします。呉を滅ぼしたとされる西施にまつわる岩にも苔が生えて、無常を感じさせることを詠っています。

**西施昔日浣紗津　　　 の**

**石上靑苔思殺人　　　の人をす**

**一去姑蘇不復返　　　一たびを去りてた返らず**

**岸傍桃李爲誰春**　　　**の　が爲にか春なる**

　　このように、呉王夫差が溺れた西施は「傾国の美女」と言われ、呉を滅ぼしたと言われています。しかし、は、国家の栄えも滅びるのも時の為せる技であって、西施の為せることではないと詠いました。この詩**「西施」**を紹介致します。

**家國興亡自有時　　　の興亡ずから時を有す**

**吳人何苦怨西施　　　何ぞ西施を怨む**

**西施若解傾吳國　　　西施 し呉国を傾けしとせば**

**越國亡來又是誰**　　　**を亡ぼし来たるは 又 れそ**

続きまして、漢と楚の興亡にスポットライトを当てます。戦国時代末期、秦が強大となり、秦の中国統一が進みました。その中で、武力では対抗できなくなったの国の太子は、を刺客として秦に送り、始皇帝を暗殺しようとしました。荊軻が秦に出発するに当たり、関係者達は喪服を着て、の岸で送別会を開き、二度と帰ることのない荊軻を送りました。荊軻は、あと少しの所で始皇帝を殺すところまで迫りましたが、暗殺は失敗し、燕は秦に滅ぼされました。

　唐のの時代のは、当時を忍び、このような事件に係わった人は全て亡くなってしまったが、易水の水だけは、当時と同じように流れていると、人の営みが自然の悠久さに比べてはかないことを詠っています。この詩**「易水の送別」**を紹介いたします。

**此地別燕丹　　　此の地 のに別る**

**壮士髪衝冠　　　 をく**

**昔時人已没　　　 人 已に没し**

**今日水猶寒**　　　**今日 水 猶 寒し**

　このようにして、他の戦国六国の抵抗も空しく、秦が中国を統一しました．秦の始皇帝は、自分の陵の建設や、万里の長城の建設など大がかりな土木工事を行い、又、などの思想弾圧を行うなど、覇権による政治を行いましたが、反乱が相次ぎ、秦は、始皇帝の死後三代にして滅びることになりました。秦の都は、に放火され、その日は三ヶ月に亘って燃え続きました。

は、この始皇帝ののさを「秦の始皇」という詩に詠い、その覇業も、秦を水徳としたことも、全て空しかったとしています。**「秦の始皇」**を紹介いたします。

**棄擲皇墳與聖經　　　ととをし**

**漫求仙藥究蓬冥　　　にを求めてをむ**

**盛稱水徳真堪笑　　　にをするはに笑うに堪えたり**

**不救咸陽火一星**　　　**の火 救わざればなり**

　又、晩唐の詩人は、「始皇陵」という詩を作り、六国が滅ぼされ、始皇陵もあれはててしまい、結局、仙薬を取りに行くと称して始皇帝から逃れ去っただけが、真の男子であったと詠っています。**「始皇陵」**を紹介いたします。

**荒堆無草樹無枝　　　に草無く 樹に枝無し**

**嬾向行人問昔時　　　に向いてを問うにし**

**六國英雄漫多事　　　の英雄 に事多く**

**到頭徐福是男兒**　　　 **れ男兒**

又、は、始皇帝の墓を訪れた際、**「秦の始皇の墓をす」**という詩を作り、天にも届くような立派は墓を作っても、今は荒れて、誰も拝するものはない。これに比べると，官の文帝の墓は、自然の山を利用した粗末な物であったが、人々は、今でも文帝の徳を慕って崇拝しつつ通り過ぎると詠いました。この詩を紹介いたします。

**龍盤虎踞樹層層**

**勢入浮雲亦是崩　　　勢い浮雲にいるもれ崩る**

**一種青山秋草裏　　　一種の の**

**路人唯拜漢文陵**　　 **すの**

続きまして、作**「長城」**を紹介いたします。秦は長城を築いて異民族を閉じ込めることに成功したが、結局、覇権的政治のために内乱により滅びた、このような壮大な長城も、国を守ることにおいては、徳を以て国を治めた**「」**の宮殿の高さが三尺しかなかったことに及ばなかったのだと詠っています。

**秦築長城比鐵牢　　　秦 長城を築いてに比す**

**蕃戎不敢過臨洮　　　敢えてにらず**

**焉知萬里連雲色　　　知らんの色**

**不及堯階三尺高**　**及ばず の高きに**

は、荒廃したを訪れ**「咸陽城の」**という詩を作りました。荒れ果てた咸陽城の様子と、永久に変わること無く流れ続けるを対比させることにより、人間の営みのさを詠っています。この詩を紹介いたします。

**一上高城万里愁　　　一たびに上れば う**

**蒹葭楊柳似汀洲　　　 に似たり**

**渓雲初起日沈閣　　　初めて起こりて 日 に沈み**

**山雨欲来風満楼　　　 来たらんと欲して 風 に満つ**

**鳥下緑蕪秦苑暮　　　鳥はに下る の暮**

**蝉鳴黄葉漢宮秋　　　蝉はに鳴く の秋**

**行人莫問当年事　　　 問うれ の事**

**故国東来渭水流　　　 流る**

このようにして，秦の滅亡により、戦国七国は皆滅びました。は、このことを詩に作りました。この詩を紹介いたします。

**強呉滅兮有荊蕀　　　滅びてあり**

**姑蘇臺之露瀼瀼　　　の たり**

**暴秦衰兮無虎狼　　　びてなし**

**咸陽宮之煙片片**　**の煙たり**

　１９７４年、の近くの土の中から、が発見されました。『史記』にはその存在が記されていましたが、２０世紀最大の発見と言われ、現在までに八千個以上の兵馬俑が発掘復元され、今も発掘調査が続いています。死去した秦始皇帝を守るために作られましたが、無駄な努力に終わり、今は観光にのみ役立っています。

　兵馬俑を訪れた現代の漢学者で詩人のは、その様子を**「秦の兵馬俑の）」**と言う詩に詠っております。これらの兵馬俑は、土に埋もれたまま、中国が太平の世の中となったのを知らず、誰を守るために勇敢な姿をし続けてきたのであろうかと、始皇帝の行為のむなしさを詠っています。この詩を紹介いたします。

**秦山之北灞之東　　　の北 の東**

**嬴征陵前黄土中　　　の 黄土の**

**不見太平開朗世　　　太平の世を見ず**

**八千兵馬為誰勇**　　　**八千の兵馬 が為にか勇なる**

続きまして、秦を滅ぼしたの興亡にスポットを当ててみましょう。楚の項羽は、武力と勇気に優れた武将であり、本拠地となる土地を持たない状態で、秦に対して反乱をおこしてから三年の間に、事実上の反乱軍の大将軍となりましたが、ただ一人対抗したのが漢のでした。

　秦の都を占領したのは劉邦でしたが、先を越された項羽は大いに怒り、劉邦の部下の讒言を受けて、劉邦を攻め滅ぼす決心をしました。ところが、項羽の叔父ののとりなしにより、劉邦が謝りに来るとあっさりと許してしまい、これをもてなす宴会を開きました。有名な「の」です。「鴻門の会」において、項羽の軍師は、再三に亘って劉邦を殺すように促し、ついには独断で劉邦を殺すことを図りましたが失敗し、取り逃がしてしまいました。これが、後の項羽の滅亡に繋がります。

　唐の詩人は、このことを**「」**という詩に詠い、もし、このとき項羽が、軍師の策を採用していれば、後にの戦いに敗れて逃げる途中、道に迷って漢軍に追い着かれ、において自殺することもなかったと歌っております。この詩を紹介いたします。

**項籍鷹揚六合晨　　　 鷹のごとく にる**

**鴻門開宴賀亡秦　　　に宴を開いて秦を亡すを賀す**

**樽前若取謀臣計　　　 し の計を取らば**

**豈作陰陵失路人**　　　 **にを失いし人とらんや**

このようにして、項羽は事実上の天下人となり、諸侯に領地を分け、劉邦を巴蜀の奥地に閉じ込めました。そして、の地に留まって天下を治めるように進言した者がいたにもかかわらず「故郷に錦を飾りたい」という子供じみた考えのために、楚の地に帰るという失策を犯しました。

　忽ち、劉邦は関中を制圧し、両軍はにおいて対決しました。退陣が長引くにつれて項羽軍は補給困難に陥り、両軍は和睦し、項羽は楚の地に引き上げを開始しました。

元好問は、**「」**という詩の中で、当時を回顧し、天下を争った両雄とも過去の人となり、どちらの無名の人物が名をなしたのは分からないと詠っています。この詩を紹介いたします。「」は、二人の勇者が烈しく争うことを示す成語になっています。また、この詩で「」というのはのことです。

**虎擲龍挐不兩存　　　 つながら存せず**

**當年曾此賭乾坤　　　 をす**

**一時豪傑多行陣　　　一時 豪傑 多く**

**萬古山河自壁門　　　万古 山河 ずから**

**原野猶應厭膏血　　　原野 にをい**

**風雲長遣動心魂　　　風雲 にを動かさしむ**

**成名豎子知誰謂　　　の 知んぬ のいぞ**

**擬喚狂生與細論**　　**をびにせんとせん**

王維は、廣武山にあったのあとを訪れ、かつて両雄が対決した城址も、今はだだの野原になってしまっていることを**「の作」**という詩に詠いました。この詩を紹介いたします。

**廣武城邊逢暮春　　　 にい**

**汶陽歸客涙沾巾　　　の 涙 をす**

**落花寂寂啼山鳥　　　落花 山に啼く鳥**

**楊柳青青渡水人　　　 水を渡る人**

劉邦は，項羽がいずれ勢力を盛り返して攻めてくると考えて和睦を破って追撃し、大軍を擁する韓信軍を動かすことに成功しました。これにより、垓下の戦いにおいて、初めて項羽軍を破ることに成功し、項羽は垓下の砦に包囲されてしまいました。韓愈の「をぎる」に詠われ、「」の語源となった状態です。韓信が，自軍の兵士に歌わせた楚の歌を歌わせた計略が成功し、項羽は、既に本拠地である楚の地が漢軍に制圧され、そこから徴用された楚の人民が、漢軍に加わっていると思いました。いわゆる「」の状態です。

　ここで、項羽は敗北を認め、軍を解散する最後の宴を開き、**「の」**を歌いながら舞い、悲憤慷慨しました。「垓下の歌」を紹介いたします。

**力抜山兮気蓋世　　　力 山を抜き気は世をう**

**時不利兮騅不逝　　　時に利あらずゆかず**

**騅不逝兮可奈何　　　のゆかざるをいかにすべき**

**虞兮虞兮奈若何**　　　**や虞やをいかんせん**

軍を解散した項羽は，側近だけを連れて包囲網を突破して逃走しましたが、に来たとき、道に迷い、農夫に騙されて方角を間違えたために、漢軍に追い着かれ、ただ一騎となって、に辿り着きました。烏江では村長が船を用意し、これに乗って逃げて再起を図るように勧めましたが、項羽は、部下を全滅させて一人だけ逃げ帰るのを恥とし、ここで自殺しました。決起してから事実上のとなったのは３年でしたが、それから滅亡するまでは、僅か５年でした。

　は、旅の途中、の地を訪れ、**「をぐ」**という詩を作り、項羽は生きている間に此処で道に迷ったが、今、項羽の魂は、どこをっているのであろうかと唱いました。この詩を紹介いたします。

**壯士悽惶到山下　　　 としてに到り**

**行人惆悵上山頭　　　 して に上る**

**生前此路已迷失　　　 の 已にす**

**寂寞孤魂何處遊**　　　**たる 何れの処にか遊ぶ**

　唐のは、項羽の廟の前で、漢祖の戦いを懐古し、「」と言う詩を作りました。項羽の勢いもこの地で尽き果てたが、今も昔の通り、には白い波頭が立ち続けていると、人の営みの儚さと自然の悠久さを対比させています。**「垓下懷古」**を紹介いたします。

**緬想咸陽事可嗟　　　にを想い くべし**

**楚歌哀怨思無涯　　　 として思い無し**

**八千子弟歸何處　　　八千の子弟 何れの處にか歸る**

**萬里鴻溝屬漢家　　　萬里の に屬す**

**弓指陣前爭日月　　　 を爭い**

**血流垓下定龍蛇　　　 垓下 を定む**

**拔山力盡烏江水　　　山を拔く力はく の水**

**今古悠悠空浪花**　　 **し**

　この時、項羽が江東の地に逃げ帰って再起を図るべきであったかについては、後の人の議論を呼びました。軍事に詳しかったは、烏江を訪れたとき、当時を回想し、恥を忍んで再起を図るのが本当の勇者でないか、あのとき江東に逃げて再起を図っていたら、戦いはどうなっていたかわからないとし、家の壁に詩を書き付けました。「」の語源となったこの詩**「に題す」**を紹介いたします。

**勝敗兵家事不期　　　勝敗は兵家もせず**

**包羞忍恥是男兒　　　を包み恥を忍ぶは**

**江東子弟多才俊　　　の 多し**

**捲土重來未可知**　**未だ知るべからず**

これに対して、は、垓下の戦いで大敗し、全軍を失った以上、故郷の地に逃げ帰っても、もはや、誰も挙兵に応ずる者はいなかったと言うことを「烏江亭に題すに和す」という詩に詠っています。どちらが正しかったかは、歴史にイフが無い以上、検証のしようがありません。**「烏江亭に題すに和す」**を紹介いたします。

**百戦疲労壮士衰　　　 疲労し しむ**

**中原一敗勢難廻　　　の いし難し**

**江東子弟今雖在　　　江東の子弟 今在りとも**

**肯与君王巻土来**　　　**肯へてのに 土を巻いて来たらんや**

項羽のは、現在でも残されております。そこを訪れた現代の漢学者で詩人のは、**「｣**という詩を作り、項羽の最後に付いての議論や、漢詩「」に示されるような批判はあったが、今では、そのようなことも忘れ去られ、廟の上に鳥が飛んでいるだけだと歌いました。この詩を紹介いたします。

**包羞何不企雄図　　　をつみ何ぞをだてざる**

**垂涙妖姫豈丈夫　　　涙をに垂るるは 丈夫ならんや**

**衆口囂囂千載後　　　 たり の**

**覇王祠上鳥相飛**　　　 **い飛ぶ**

この辺で、日本に目を転じてみましょう。冒頭に紹介した如く、「おごれる人も久しからず。」と言われる如く、公卿１６人、殿上人は３０余人、日本の半分近くを知行国として隆盛を誇り「この一門にあらずば人にあらず。」とまで言われた平家も、源頼朝の軍にの戦いで惨敗し、の戦いで木曽義仲の軍により壊滅的な打撃を受け、義仲の入京を食い止められなくなり、現在の神戸近くにあった本拠地、「一ノ谷」に退くことになりました。いわゆる「平家の都落ち」です**。**

都落ちに際し、の和歌のであったは、俊成の邸宅を訪れ、和歌を書いた巻物をあずけ、将来、を作る機会があれば、このうちの一首でも採用して戴くことを依頼しました。俊成は快く受け入れました。

藤原俊成は、この後「」を編纂することになり、平忠度から托された巻物を見てみたところ、その中には多くの秀歌が含まれておりました。しかしながら、既に平家は朝敵とされており、その歌を勅撰和歌集には載せるわけにはいきませんでした。そこでやむなく、特に優れた「の」と題する一首のみを、「読み人知らず」を採録しました。**「故郷の花」**を紹介いたします。

**さざなみやのはれにしをながらのかな**

平家が新たな都とした、現在の神戸市近くは、前後を海と山に囲まれた要害の地であり、平家は東西に堅固な寨を気付き、しばらく、安泰な月日を過ごしました。

　一方、源氏も戦支度を整え、東西から平家の陣営に攻めかかりました。しかし、源氏の軍勢も、この堅固な砦を突破する事が出来ませんでした。ところが、平家にも思いがけない油断がありました。かって、憐れんで命を助けた乳飲み子が、天才的な武将となり、攻め下れないと思われた絶壁のあるの山頂から、平家の本営を見下ろしていたのです。この様子を詠った梁川星巌作**「常盤孤を抱くの図」**を紹介いたします。

**雪灑笠檐風捲袂　　　雪はにいで風 を捲く**

**呱呱覓乳若為情　　　 乳をむる のぞ**

**他年鉄枴峰頭嶮　　　他年　の**

**叱咤三軍是此聲**　　　**三軍を叱咤するは 是れ此の声**

銕枴山から、いわゆる「ひよどり越えの坂落とし」により攻め下った義経の軍は、平家の本営に火を放ちました。これにより、平家の軍勢は総崩れとなり、沖にあった船に逃れましたが、その途中で多くの武将が討たれました。

　は、船に逃げようとする一人の平家の武将を呼び止めて、一騎打ちの結果、これを組み敷いて首を取ろうとしたところ、相手が少年であることに気づき、憐れんで逃そうと考えましたが、もはや、味方の大勢の人々が見ており、やむなく首を取りました。この武将は笛の名手であり、「の」の持ち主でした。「青葉の笛」は、が唐ので作り、に献上したとされる名笛です。

　は、このことをして**「平敦盛」**と題する詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**笛聲嫋嫋斷人腸　　　人のを断つ**

**夜冷陣中憶故郷　　　夜は冷ややかにしてをう**

**誰識傷魂空入夢　　　からんしく夢に入るを**

**恩讐兩解涙痕長**　　　**つながら解けて長し**

　一方、平忠度は、桜の木の下で一夜を過ごし、翌日源氏の郡に紛れて逃れようとしましたが、お歯黒を付けていたために見破られて討ち取られました。そののに紙切れが結ばれており、それには、「の花」と題する和歌が書かれていました。

この和歌を紹介いたします。

**きれてのかげをとせば やのあるじならまし**

　その後、一ノ谷を訪れたは、もはや当時の面影が無い中にも、猶残る平家の怨みを感じ**「一ノ谷懐古」**を詠じました。この詩を紹介致します。

**二十餘春夢一空**

**豪華吹散海隅風**　**きず の**

**山排殺氣参差出　　　はをして で**

**潮迸寃声日夜東　　　はをらして す**

**憶昔満宮悲去鷁　　　う をしみ**

**欲将往事問飛鴻　　　をって にわんとす**

**爛斑剰見英雄血　　　える の**

**塹樹鵑啼朶朶紅　　　 いて なり**

壇ノ浦に追い詰められた平家は、追い着いた義経軍に対して最後の決戦を挑みました。この戦は、最初は平家に優勢でしたが、舟の漕ぎ手に矢を射かけるという義経の型破りの戦法の為に惨敗を喫し、ほぼ全て討ち取られたり入水したりしました。

　二位の尼に抱かれて入水されたのは、遺体が流れ着いたとされる山口県下関市のにあるとされております。阿弥陀寺を訪れた女性詩人は、「」という詩を作りました。春の日に照らされた陵の前で、昔のことを思い出そうとしたが、その思いに背くように、水辺の鷗が飛び去ってしまったと詠っています。**「阿弥陀寺懐古」**を紹介いたします。

**弥陀陵寝鎖春暉　　　の にさる**

**小帝西巡終不帰　　　して にらず**

**向水浜要問当昔　　　にって をわんとするも**

**白鷗無数背人飛**　　　 **にきてぶ**

　は、旅の途中、で船泊まりし、当時を偲んで**「」**と題する詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**篷窓月落不成眠　　　 月落ちて 眠りを成さず**

**壇浦春風五夜船　　　壇ノ浦の の船**

**漁笛一聲吹恨去　　　 　を吹いて去る**

**養和陵下水如煙**　　　 **水 煙の如し**

　かくして、栄華を誇った平家も「盛者必衰」の理の如く、あえなく滅亡を遂げました。かつて徳子に使えていたはを訪れ、徳子の昔に比べた今の暮らしに涙を流し、次のような和歌を詠みました。

**ぎしののの　かかるのぞしき**

中国においては、漢の統一後も，王朝の交代が行われ、そのたびに反映していた都や楼閣が廃墟となりました。日本においても、政権の交代などに伴い、楼閣や都が廃墟となりました。こうした「諸行無常・栄枯盛衰」を詠った詩歌をいくつか紹介していきたいと思います。

　の詩で有名なは、漢の時代に庭園があった場所でしたが、豪族の陵墓も築かれておりました。晩唐の時代には荒れ果てており、杜牧は「楽遊原に登る」という詩を作ってその様子を詠っています。**「楽遊原に登る」**を紹介いたします。

**長空澹澹孤鳥沒　　　 として 沒す**

**萬古銷沈向此中　　　 し 此のに向う**

**看取漢家何事業　　　せよ 何んの事業ぞ**

**五陵無樹起秋風**　　　**五陵のの を起こす無し**

漢の後、魏、呉、蜀の三国時代に入りました。後漢の末に曹操が「」という楼閣を作ったことは有名ですが、唐の時代にが訪れた時は，廃墟となっていました。岑參は、その様子を**「に登る」**という詩に詠いました。紹介いたします。

**下馬登鄴城　　　　　馬を下りてに登る**

**城空復何見　　　　　城は空にしてた何を見ゆ**

**東風吹野火　　　　　東風は野火に吹く**

**暮入飛雲殿　　　　　暮ににる**

**城隅南對望陵臺　　　城のよりは南に対し**

**漳水東流不復回　　　は東に流れびらざる**

**武帝宮中人去盡　　　武帝の宮中より人はく去る**

**年年春色為誰來**　　**年年 色はが為にる**

三国時代の末、新しく台頭したがとを併せ、最後にのを陥落させて中国を再統一しました。は、石塔城を訪れ、その荒れ果てた様子を**「石塔城」**という詩に詠いました。この詩を紹介いたします。

**山圍故國週遭在　　　山は故国を囲みて して在り**

**潮打空城寂寞回　　　はを打ちて としてる**

**淮水東邊舊時月　　　の の月**

**夜深還過女牆來**　　　**夜 深くしてた をぎて來たる**

　も旅の途中、の跡を訪れ、や呉の王の墳墓も今はに蔽われている様子を**「石塔城を過ぐ」**という詩に詠っています。この詩を紹介いたします。

**累累墟墓葬西原　　　たる にむり**

**六代同歸蔓草根　　　同じく帰すの**

**唯是歲華流盡處　　　だれ 流れ尽くるの処**

**石頭城下水千痕**　　　**石頭城下**

　晋の滅亡後、中国は五胡十六国時代を経て南北朝時代に入ります。南朝の都は現在の南京である金陵におかれました。金陵の都に面して「」という町がおかれ、栄えておりましたが、南朝の金の滅亡と共に寂れてしまいました。は「」という詩において、その様子を詠っております。**「烏衣巷」**を紹介いたします。

**朱雀橋邊野草花　　　 野草の花**

**烏衣巷口夕陽斜　　　 斜めなり**

**舊時王謝堂前燕　　　の の**

**飛入尋常百姓家**　　　**飛んで の家に入る**

　も、れた金陵の様子を『唐詩三百首』に**「金陵の図」**として採られている詩に詠っております。六朝の栄華を残す物は何もなく、ただ、当時と変わらないのは、自然だけであると詠っております。

**江雨霏霏江草斉　　　 として し**

**六朝如夢鳥空啼　　　 夢の如く 鳥 しく啼く**

**無情最是台城柳　　　なるは最もれ台城の柳**

**依旧烟籠十里堤**　　　**に依って煙はむ 十里の堤**

は、また『全唐詩』に**「の」**として採られている詩を作り、絵に描かれたが今では荒れ地になってしまっている様子を詠いました。これは、『唐詩三百首』にとられている物と同じ図を見て作った物と思われます。

**誰謂傷心畫不成　　　かうしけども成さざる**

**畫人心逐世人情　　　の心はの情をう**

**君看六幅南朝事　　　君 看よ 南朝の事**

**老木寒雲滿故城**　　　**に滿つ**

　南北朝時代の終わりには、北朝はに統一され、南朝はに統一されました。陳の五代目の皇帝であるは、詩人としては優れており、寵妃のを讃えて作り、豪華な宮殿の庭で、後宮の美女千数百人に歌わせたという「」は、特に名作とされました。しかし暗君であり、宴会や遊興にふけり、国政を顧みなかったために国力は衰退し、隋によって滅ぼされました。このため「玉樹後庭花」は亡国の歌曲として後に伝えられました。

の都であった金陵の近くのの畔の旅館に泊まった杜牧は、妓女達が歌う「玉樹後庭花」が対岸から聞こえてくるのを聞いて「にす」という詩を作りました。すでに、唐の政治は乱れており、軍事に詳しかった杜牧には、唐の滅亡の予感があり、この詩を作ったのかも知れません。実際、杜牧の死後、まもなく黄巣の乱が起こり、唐は事実上滅亡しました。**「秦淮に泊す」**を紹介いたします。

**煙籠寒水月籠沙　　　煙はをめ 月はを籠む**

**夜泊秦淮近酒家　　　夜 にして に近し**

**商女不知亡國恨　　　は知らず 亡国の恨み**

**隔江猶唱後庭花**　　　**江を隔ててう**

　陳を滅ぼして、再び中国を統一した隋でしたが、二代目のは暴君であり、豪奢な生活をすると共に，長安を都とするために大がかりな工事を行い、また、黄河と長江を結ぶ大運河であるを完成させました。運河の両岸には柳の木を植え、完成のデモンストレーションとして、自らに乗り、大勢の人民に船団を引かせて、まで行幸しました。

　しかし、このような豪奢な生活のために、揚州で殺され、時代は唐に移りました。

　に植えられた柳の木も疎らになり、も荒れ果ている様を、が「」に詠いました。**「楊柳詩詞」**を紹介いたします。

**煬帝行宮汴水濱　　　の の**

**數枝楊柳不勝春　　　の 春に えず**

**晩來風起花如雪　　　 風 起って 花 雪の如く**

**飛入宮牆不見人**　　　**飛んでにって 人を見ず**

　は、隋のの暴挙と栄華の後が跡形もなくなっていることと、陳の後主の亡国の歌「」とを重ね合わせた「」という詩を作り、もし唐が隋を倒さなかったら、煬帝の暴挙は果てしなく続いたであろうが、今は、その後影もない。煬帝があの世で陳の後主にあったら、とても**「玉樹後庭歌」**を希望することは出来ないであろうと歌っています。「隋宮」を紹介致します。

**紫泉宮殿鎖煙霞　　　の宮殿 にざされ**

**欲取蕪城作帝家　　　を取りてとさんと欲す**

**玉璽不縁帰日角　　　 に帰するにらざれば**

**錦帆応是到天涯　　　 にれ に到るべし**

**於今腐草無蛍火　　　今に於いてはに無く**

**終古垂楊有暮鴉　　　 に有り**

**地下若逢陳後主　　　地下にてしのにわば**

**豈宜重問後庭花**　 **しく重ねてを問うべけんや**

の、のと言われる善政の結果、唐はの時代に最盛期を迎えますが、玄宗皇帝がに溺れ、政治を顧みなくなったことにより、のが勃発し、その後唐は衰亡へと向かいます。

　長恨歌に「春寒うして浴を賜うの」と詠われた、豪華なも、後の皇帝から見捨てられて、雑草が生い繁里、月をでる人も無くなりました。はこの様子を**「華清宮三首のうち其の一」**に詠いました。結句は、李白の「清平調詞其の三」を元にしております。この詩を紹介いたします。

**草遮迴磴絕鳴鑾　　　草はを遮えぎりてをつ**

**雲樹深深碧殿寒　　　として寒し**

**明月自來還自去　　　 ずから來りてたずから去る**

**更無人倚玉欄干**　　　**更に人のにるなし**

白居易は、玄宗皇帝が楊貴妃と歓楽を共にしたを訪れ、誰も顧みなくった様子を**「の弟子」**という詩に詠いました。「梨園」とは、音楽官達が済んでおり、音楽教育も行っていた場所です．その弟子達が昔を語るのも空しく、華清宮の門は閉じられたままでした。

**白頭垂淚話梨園　　　 淚を垂れてを話る**

**五十年前雨露恩　　　五十年前 恩**

**莫問華清今日事　　　問うことかれ の事**

**滿山紅葉鎖宮門**　**のをざす**

また、玄宗皇帝の豪華な行宮もみすてられて忘れられ、ただ一人の宮女が残っているだけの場所もありました。白居易の親友であったは、この様子を**「」**という詩に詠いました。この詩を紹介いたします。

**寥落古行宮　　　たり**

**宮花寂寞紅　　　 として なり**

**白頭宮女在　　　の 在り**

**閑坐説玄宗**　　　**してをく**

　隆盛を誇った唐も、の以後分裂状態になり滅びました。分裂状態にあった時代の詩人は、のに上り、そこから見える破壊された長安の様子を「慈恩寺の塔に登る」という詩に表しました。この詩を紹介いたします。

**紫雲樓下曲江平　　　 平かなり**

**鴉譟殘暘麦隴青　　　はにいで青し**

**莫上慈恩最高處　　　上るかれ慈恩 最も高き処**

**不堪看又不堪聽**　　　**看るに堪えず又聽くに堪えず。**

は、又、**「の」**という詩において、乱により自分の家を 逐われて、楼に上ってみると、その地方は荒れ果てて野原となっている様を詠っています。この詩を紹介いたします。

**四鄰侵我我從伊　　　我をして 我に従う**

**畢竟須思未有時　　　からく思うべし未だ有らざる時を**

**試上含元殿基望　　　試みにに上りて望めば**

**秋風秋草正離離**　　　**秋風 秋草 正にたり**

権勢を誇った王公貴族は、楼閣を建ててそこで宴会等を行いました。しかし、権勢も長くは続かず、それらの楼閣は人の住まないものとなり、荒れ果てました。これらの楼閣を詠った詩を紹介します。最初に有名なの**「」**を紹介いたします。滕王閣は、唐の初代皇帝の子でとなったが建てたものであり、、と共に、中国の三大楼閣と言われています。時代と共に人の住まない楼閣となりました。人間の営みと自然の悠久さを対比させた詩です。

**滕王高閣臨江渚　　　の高閣 にむ**

**珮玉鳴鸞罷歌舞　　　 む**

**畫棟朝飛南浦雲　　　 に飛ぶ の雲**

**珠簾暮捲西山雨　　　 暮に捲く の雨**

**閒雲潭影日悠悠　　　 日に**

**物換星移幾度秋　　　物換わり星移る の秋ぞ**

**閣中帝子今何在　　　の 今くにか在る**

**檻外長江空自流　　　の長江 空しくずから流る**

同じように、安史の乱で大功をあげ、に報ぜられたは、漢の名将を模試のぐ勢いで、豪華な邸宅を建てましたが、その邸宅のあった歌舞の地は、邸宅は跡形もなく、槐の木が疎らに生えて夕日に照らされているだけでした。これを詠ったの**「をる」**を紹介いたします。

**門前不改舊山河　　　門前 改めず旧山河**

**破虜曾輕馬伏波　　　を破りて 曾つてを軽んず**

**今日獨經歌舞地　　　今日 り歌舞の地をたれば**

**古槐疏冷夕陽多**　　　 **にして多し**

日本においては、平城京が作られる前は、都は度々変わりましたが、廃れた都を詠った歌は残されておりません。しかし、天智天皇が「」の海戦において唐の軍に惨敗をして後、唐の侵略を恐れて作られた志賀の都だけは、その荒廃ぶりが多くの和歌に残されております。壬申の乱により、に帰したせいでしょうか。

その中で柿本人麻呂が作った**「近江の荒れたる都にる時、柿本朝臣人麿がよめる歌」**が代表作です。この長歌と反歌を紹介いたします。

**玉たすき　の山の　の　ひしりの御代よ**

**れましし　神のことごと　(つが)の木の　いやぎぎに**

**天の下　知ろしめししを　そらみつ　大和を置きて**

**よし　奈良山越えて　いかさまに　思ほしけめか**

**る　にはあらねど\*　る　淡海の国の**

**の　大津の宮に　の　ろしめしけむ**

**の　神のの　は　ここと聞けども**

**は　ここと言へども　霞立つ　春日かれる**

**夏草か　繁くなりぬる　ももしきの　　見れば悲しも**

**反歌**

**の志賀のくあれどの船待ちかねつ**

**の志賀の　むとも昔の人にまたも逢はめやも**

柿本人麻呂は、志賀の都について、別の和歌を詠んでおります。この和歌を紹介いたします。

**の海　　が鳴けば　心もしのにほゆ**

平安時代末期から源頼朝によって滅ぼされるまで、奥州藤原氏は事実上の独立国を形成して、、、三代に亘って栄華を極め、栄華の象徴として今に残る中尊寺金色堂があります。その中心地である平泉を訪れた松尾芭蕉は、『奥の細道』において、当時の有様を記載しました。藤原氏の邸宅は失われ，金色堂も荒れ果てていまいした。『奥の細道』の**「平泉」**を紹介いたします。

**三代の一睡の中にして、の跡は一里こなたに。が跡は田野に成りて、のみ形を残す。 にのぼれば、北上川南部より流るゝ。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に。が旧跡は、衣が関を隔てて、南部口をさし堅め、をふせぐとみえたり。も義臣すぐつてにこもり、のとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、て、時のうつるまでを落し侍りぬ。**

**夏草や どもが夢の跡**

**てしたるす。は三将の像をのこし、は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝うせて、珠の風にやぶれ、の柱 にて、 のとべきを、にて、をて風雨を。のとはなれり。**

**ののこしてや**

奥州藤原氏の栄枯盛衰は，の「」にも詠われております。**「平泉懐古」**を紹介いたします。

**三世豪華擬帝京　　　の豪華 にす**

**朱樓碧殿接雲長　　　 雲に接して長し**

**只今唯有東山月　　　只今 惟 の月のみ有りて**

**來照當年金色堂**　　　**来たり照らす 当年の金色堂**

平安京から続いた京都も、応仁の乱により焼け野原になったことがありました。京都を訪れたは、巣を人に見せないが巣から飛び立つほど荒れ果てた都の様子を和歌に詠いました。この和歌を紹介いたします。

**や知る都は野辺のあがるを見ても落つる涙は**

日本には、かつての城があった後が荒れたてた姿を詠った詩が多く作られています。これらの主な物を紹介していきましょう。

　初めに小田原城を詠った詩を紹介します。

小田原城は、豊臣秀吉によって滅ぼされる前は、北条氏の本拠地であり、小田原城は、武田信玄、上杉謙信の攻撃にも耐え、難攻不落を誇っておりました。

小田原の北条氏のを訪れたは、山に囲まれて空しく残っている古城を目にし、諸行無常の感を**「小田原城に登る」**という漢詩に表しました。

この漢詩を紹介致します。

**関左由来誇勁兵　　　 をる**

**千峰今日獨崢嶸　　　 今日 り****たり**

**英雄覇業茫無跡　　　の としてし**

**疎雨寒烟滿孤城　　　 につ**

続きまして、八王子にあった「」の城址を角光嘯堂が詠った「滝山城懐古」と同時に作られた和歌を紹介いたします。「滝山城」は、武田氏と北条氏の戦いで重要な役割を果たしましたが、北条氏が「八王子城」を重視するようになってから、廃城になりました。

**花に酔い月に酔いにし夢のあとさびしき滝山の城**

**弦月淡淡沈古城　　　 古城に沈み**

**蟲聲切切悲秋感　　　 の感**

**熒古盛衰一場夢　　　 の夢**

**荒城悄然月朧朧**　　　**荒城 悄然 月**

浅井長政の城であった小谷城は、豊臣秀吉の攻撃により落城しました。浅井長政は、妻子を脱出させた後に、城と運命を共にしました。小谷城後を訪れたは「小谷城懐古」という詩を作り、雑草の生えた城址の中に、潔かった浅井長政に似た竹が、風を受けて清らかな音をたてている様子を詠っています。「」を紹介致します。

**将星更不顧輸贏　　　将星 更にを顧みず**

**強別妻孥貫款誠　　　いてに別れてを貫く**

**今日丘墟荒草裏　　　 の**

**翠筠猶是掛清聲　　　 をく**

今では観光名所となっているエジプトのピラミッドやスフィンクスも、かつてはファラオの栄華を示すものであり、ピラミッドの表面は磨き石で飾られていました。現在、我々が見ているのは、全て荒廃した姿です。は、「エジプト懐古」という詩を作り、ファラオ達の栄華は去ったが、ナイル川だけは今も変わらず流れているという、人の営みのさを示す詩を作りました。**「エジプト懐古」**を紹介致します。

**三角陵荒歳月悠　　　は荒れて 歳月かなり**

**怪神像古没沙丘　　　はりて に没す**

**帝魂不返繁華盡　　　返らず　尽く**

**唯有大江依舊流**　　　 **のにって流るる有るのみ**

冒頭に紹介いたしました『平家物語』の冒頭部のように、「諸行無常」を詠った詩は

中国でも作られております。この詩の紹介を最後に『物語で楽しむ漢詩・和歌』「諸行無常・栄枯盛衰」を終わります。

**去者日以疎　　　去る者は日に以てく**

**來者日以親　　　来る者は日に以て親しむ**

**出郭門直視　　　をでて直視すれば**

**但見丘與墳　　　だ丘ととを見るのみ**

**古墓犁爲田　　　はかれて田と爲り**

**松柏摧爲薪　　　はかれてと爲る**

**白楊多悲風　　　 悲風多く**

**蕭蕭愁殺人　　　として人をす**

**思還故里閭　　　のにらんと思い**

**欲歸道無因**　　**帰らんと欲するも道に る無し**

　（令和２年９月２１日作成）

参考文献等

　『中国漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『日本漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版